



MFC SLOT 2010 FUJI GC GUEST RACE

蘇る富士グランチャン・シリーズ

1971年にはじまり、日本を代表するスポーツカーレースとして一時代を作った富士グランチャンピオン・レース。あの富士GCが復活する! という報せを聞いて訪れたのは、本誌でもお馴染み東京・世田谷の lindbergh にオープンしたスロットサーキット。そこで、当時のドライバーにより1/24の富士GCが幕を開けた!

text: Yoshio FUJIWARA (藤原彦雄) photo: Junichi OKUMURA (奥村純一)
editorial design: H.D.O. (堀口デザイン事務所)
取材協力: Modelcar Racing Grand Champion Fan Club
(URL: <http://www.diana.dti.ne.jp/slotcar/>)
Lindbergh-Raceway (phone: 03-6411-6384 URL: <http://www.lindbergh.co.jp/>)
BAN-PROJECT (<http://www.banproject.com/index.html>)

いま、スロットカーが趣味人の間で再燃している。そのスロットカー熱を象徴するかのよう、今年2月13日、クルマとバイクの専門書店としてお馴染みの東京・世田谷にある lindbergh に本格的スロットカーコース「 lindbergh レースウェイ」がオープンした。そのオープン直後に関係者を招いて行われたのがこの「富士GC同走会」。なんと本物のGCレーサーが、1/24の愛車を駆ってレースをするという、なんとも豪華なプライベートイベントである。

発起人は、1/24での日本GP、カンナムをテーマにしたシリーズ戦を行っているスロットカークラブ MFC (Modelcar Racing Grand Champion Fan Club) の主宰、田村吉幸さん。この富士GC同走会は、熱狂的な富士GCファンでもある田村さんの呼

びかけで、2008年以来、年に一度だけ行われているものだそうで、今回は過去最大となる12人のゲストが集った。

果たして肝心のレースは? という、メインイベントである富士GC同走会は、有志によって正確に再現された1/24のGCカーを用いて6ヒートの総周回数を競うという本格的なもの。しかも1/24とはいえ、クルマの挙動、操作の理屈は本物と変わらないので速く走らせるのは至難の業だ。

しかしそこはプロ。皆さんこの時以外はスロットをしないとはいいながら、走り出し数分後にはクルマのクセをマスター。本戦が始まる頃になると、各自かなり良いラップを記録するようになっていた!

その中で例外だったのは、今回初参加の高原敬

武さん。1970年代に白金サーキットで由良拓也さん、解良喜久雄さん、Bowさん (1) とスロットカー三昧の日々を送っていたというだけあり、その腕前はブランクを感じさせないほど。いきなり出場して圧倒的な強さをみせるあたりは、GC連覇時代のそれを彷彿とさせるものだった。

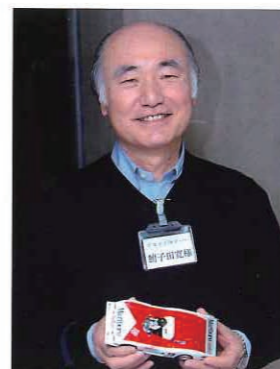
さて、決勝レースは負けず嫌いのレーサーの集団だけあって、途中コースに人為的な雨が撒かれたり (1)、心理戦が行われたり、実に和気藹々とした雰囲気で行われた。結果は断トツでトップを堅持していた高原さんを最後に高橋晴邦さんが逆転するという劇的な展開に。その後、MFCメンバーとゲストによる団体耐久戦も行われ、丸1日スロット漬けの楽しい同走会となった。



過去行われた富士GC同走会の中で最大規模となった今回は、9人のドライバーと3人の関係者という計12人の参加者が集った。まずはレースを前に記念撮影。このまま全国で興行したら流行るのでは? と思わせる豪華な布陣。



津々見友彦
●ヒロビタンローラT290
1963年第1回日本GPにDKWでレースデビューと、今回のメンバーの中で最も4輪レース歴の長い津々見さん。「本物のレースと同じです。ただGCはストレートで休めるけど、これは休めない。本物を運転しているほうが楽(笑)」



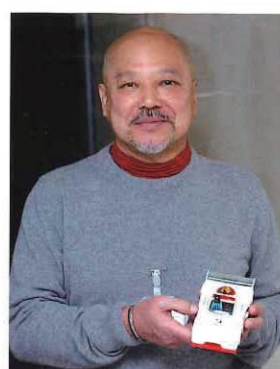
黒子田寛
●マルボロサファリマーチ75S
1965年ホンダS600でレースデビュー。富士GCでは72年に総合タイトルを獲得している黒子田さんは、MFC名誉会長も務める。「肩が凝るよ(笑)。あんまり速いから、誰かサイン出してくれないかな」とかかさないよ!



長谷見昌弘
●アルビオン・ルノーA441
二輪を経て1965年にブルーバードSSでデビューした長谷見さんは、かつてGC&耐久で駆ったA441で参戦。「機型だから飛んでも恐怖感ないでしょ。でも! いったい今日何回死んだらと思うと気持ち悪くなっちゃうよ!」



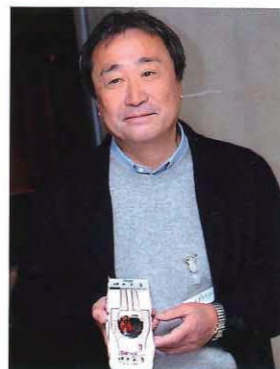
見崎清志
●APOジャパン・マーチ74S
1965年、ホンダS600でデビュー。'67年にTEAM TOYOTAに加入した見崎さんは、'74年にドライブしたAPOジャパン・マーチで出場。「1年に1回しかやらないから、全然分らない!」といいつつ見事P.Pを獲得。



寺田陽次郎
●シェブロン・マツダB36
1965年ホンダS600でレースデビュー。日本人で初めて世界三大24時間レースに出走した経歴をもつ寺田さん「ミスターラン」。空いた時間を使ってタイヤのメンテを入念にするなど勝負に掛ける姿勢はさすが。



高橋晴邦
●ウォルターウルフ・シェブロンB36
1966年フェアレディ2000でデビュー。今回は自身が監督を務めたウォルターウルフB36で参戦。「本物は目で見た情報と、肌で感じた感覚をもとに走る。でもこれは目で見た情報をいかに指に伝達するかが勝負。それが難しいんだ!」



高原敬武
●伊太利屋マーチ74S
1969年ホンダS600でデビュー。1973年、75、76年の富士GC王者。「コースによって稼げる区間と力を抜く区間の見極めが大切。あとはコースアウトしない走り続けること。ポイントは本物のレースと同じだよ!」



戸谷千代三
●レノマ・マーチ74S
1969年ホンダS600でデビュー。耐久レースを中心に活動し、80&81年には富士500マイルを制する。今回初参加で初スロットのことだったが、走り始めるやいなや「いや、これハマっちゃいますね!」と一言。



関谷正徳
●伊太利屋ロータリー・マーチ75S
1972年マツダロータリークーペでレースデビュー。国内各カテゴリで活躍し、'95年に日本人で初めてル・マン総合優勝を飾る。「ル・マンよりこっちの方が集中力があるよ。レースカーに集中力なんかからないもん(笑)」



福士克二
●丸善ローラT292
富士スピードウェイ社員としてGCシリーズの事務局を担当。今回は鈴木誠一のローラT292をドライブ。「スロットカーは1年に1回しかやらないです。でもこういうメンバーと再会できるのは嬉しいね!」



原富治雄
●シェブロンB23
富士GCを追いかけたカメラマン側の代表として参加の原富治雄さん。前年のレースでは2位入賞を果たした腕の持ち主でもある。「普段撮る側だから緊張しますね! 全国のCANON GALLERYで「原富治雄 写真展」開催中。



山口正己
●ロンソソ2000
ジャーナリスト代表として参加した山口正己さん。現在、どこよりも濃いF1雑誌「STINGER」の編集長も務める。初参加、初スロットゆえ「緊張のあまり逃げ出したくらい!」



かつて白金サーキットでスロットに熱中していたという高原さん。その腕前はブランクを感じさせない。中央は今回の首謀者MFC代表の田村吉幸さん。



富士GCゲストレーサーの優勝は高橋晴邦さん。「ルーキー(高原)に勝たせちゃまずいでしょう!」



lindbergh 40分耐久レースは、1995年ル・マン仕様のマクラーレンF1を駆った関谷/原/家本/藤井組に。

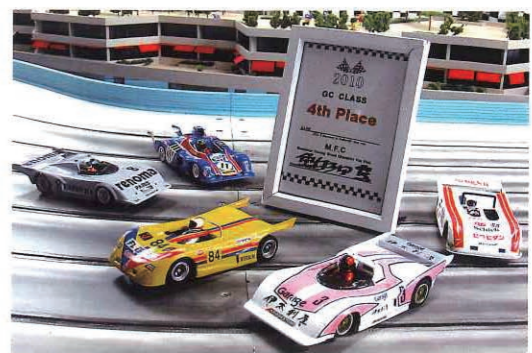
●RESULT 富士GCゲストレース

1位	高橋晴邦	ウォルターウルフ・シェブロンB36	243周
2位	高原敬武	伊太利屋マーチ74S	239周
3位	見崎清志	APOジャパン・マーチ74S	222周
4位	寺田陽次郎	シェブロン・マツダB36	221周
5位	長谷見昌弘	アルビオン・ルノーA441	215周
6位	原富治雄	シェブロンB23	212周
7位	山口正己	ロンソソ2000	211周
8位	津々見友彦	ヒロビタン・ローラT290	211周
9位	福士克二	丸善ローラT292	205周
10位	戸谷千代三	レノマ・マーチ74S	204周
11位	関谷正徳	伊太利屋ロータリー・マーチ75S	200周
12位	黒子田寛	マルボロサファリ・マーチ75S	198周

●RESULT lindbergh 40分耐久レース (交流会)

1位	関谷/原/家本/藤井組	370周
2位	津々見/高橋晴邦/牧石組	366周
3位	寺田/高原/白井/知久組	363周
4位	黒子田/戸谷/高橋(MFC)/田村組	360周
5位	見崎/山口/伴野/ lindbergh 組	357周
6位	長谷見/福士/水谷/山本組	332周

走り出してももの数周でグレートドライバーの目がマジになった!



「日本一の負けず嫌いが集まるだけあって、車輪撮影から火花がバチバチ。[このメンバーならオレが一番速い]と自分のクルマを前に押す黒子田さん。」

この2月にオープンした lindbergh レースウェイは、国内屈指の本格的スロットカーコース。大型のモニターにラップやタイムも表示されるなど設備も十分。